

フィリピンスタディツアー2019 報告

8月2日(金)～7日(水)までダバオへのスタディツアーを開催しました。今年の参加者は5名(申し込み6名、1名前日キャンセル)でした。

◆スケジュール◆

- 8月2日(金)、マニラ集合、ダバオ
- 8月3日(土)、RGS-COWとマリガヤハウスのオリエンテーション
ホームステイ先と合流。ホームステイ先へ移動
- 8月4日(日)、AM:ホームステイ先で過ごす。
PM:ホームステイ先で昼食後、RGS-COWに集合。シェアリング
- 8月5日(月)、AM:家庭訪問(1件)
PM:国際ミンダナオ大学福祉学科見学・交流、お買いもの
- 8月6日(火)、国内線でマニラに移動。バクララン教会、バクラランマーケット散策
- 8月7日(水)、解散

参加者たちからの感想をご紹介します♪

◆最も印象に残っているプログラム&その理由

★感想

◆ホームステイ

(理由) ホームステイのご家族と過ごさせて頂いたこと、宿泊もさせて頂いたことはとても貴重な時間でした。

★初めてフィリピンのスタディツアーに参加させていただきました。特に、ホームステイのご家族の家庭に宿泊させて頂いたことがとても印象に残りました。言葉の壁もあり、コミュニケーションがとりにくかったことを反省しています。それでも、理解しようとしてくれていたことにとても感動しました。

フィリピンにお伺いさせて頂き、改めて生活習慣や環境などにとても影響を受けました。今回のスタディツアーでとても貴重な時間を過ごすことができよかったです。本当にありがとうございました。

(渡部純也さん、(株)ローカス職員)

※(株)ローカスさんはDNA鑑定の会社で、長年JFCネットらの研修を受け、鑑定採取の資格を持っていますので、母子は鑑定のために来日することなく、フィリピンにいながらにして鑑定を受け、金銭的な負担なく、裁判を続けることができます。



◆ホームステイ

(理由) フィリピンにいる子どもたちがなぜ父親を捜しに日本に来たいのか、その思いや彼らの生活を垣間見ることができたから。

★今回、昨年と同じホームステイ先にステイさせて頂きました。

今年、19歳になる彼女は、もうすぐ日本国籍が取得できるという期待、しかし、日本でどうやって生活していけるのかという不安の中で揺れていました。

昨年は父親への想いを切なく語ってくれたのですが、今年は、父親への憧れは失せ、家族の生活を支えるために日本で働きたいという思いが、より強まっていました。

1歳未満の二人の赤ちゃん、小学生二人、中学生一人、高校を学費は払えないため中退した彼女と、母親、祖父母と祖母の弟の10人が、二つのベッドルームと居間一つの3部屋に暮らしているのです。

毎日、赤ちゃんの世話をするのが彼女の仕事。中学校トップの成績で学ぶ意欲もある少女が、どれだけいろんな思いを飲み込んで日々生活をし、家族を楽にするために日本で働きたいと語ったのか。その覚悟を人間として尊敬します。

だからこそ、もし来日するならば、いかがわしい業者やリクルーターにひっかかることなく、彼女自身の未来を考えられるような仕事、生活につなげてあげたい。そしていつか学びの場に戻れるように応援したいと思っています。

厳しい環境を前に、私が何をどこまでできるのかはわかりませんが、少なくとも気にかけて、何かあったときに手を出すことのできる大人でありたいです。

(太田直子さん/フリー映像ディレクター)

◆ホームステイ先のJFCの話

(理由) 昨年と同じホームステイ先として引き受けてくれた彼に感謝。またそれを可能としてくれたCOWのシスターに大感謝。そのシスターが移動になってしまうといので、これから少し不安です。JFCの事情もそれぞれ違うわけで、必死に父を求めてかなわないJFCと縁ができると、「何があっても、あなたはあなた」と彼に伝えるしかできない自分の忸怩たるおもいが残りました。

★昨年のホームステイ先での報告を以下のように書きました。

ダバオでのJFCホームステイで、ボロボロになって顔も薄れてしまった父親との幸せだった写真をととても大事にして、それを見せてくれ、そして、父は自分を愛しているはずだ、と何度も繰り返す。日本での経験からアルコール依存症になって精神的にもうつ症状だという母も夜中話をしてくれた。実際の暮らしの場での語りにも少しでも接することができて、同じJFCといってもひとくくりにはできないのだと再確認させられた。



そして今年。JFCが父と信じていた男性との親子関係が?となり、昨年は、アルコール依存症となった母親が、断酒して、元気に食事を一緒に作ったのに、今年は母親について会えず仕舞いでした。親戚一同が9戸の家で暮らし、坂の下から上まで肩を寄せ合うようにしてある家々を、私は自由に行き来させてもらうようになり、おばさんたちが入れ代わり立ち代わり料理を作りに来てくれて、子どもたちも猫もサルも犬も自由に9つの家を行き来している。でも彼は混乱している、と正直に話してくれました。

親戚の家々も、若者たちは日本だけでなく、中東にも出稼ぎに行って、送金してくれている。その中で、JFCであり日本人の父親が見つかるばそれで日本国籍が取得でき、日本に働きに行けると思っていた彼の落胆もさることながら、親戚一同の落胆ぶりも感じられるホームステイでした。これでは彼の母親も家に居づらいかもかもしれないとも、僭越ながら思っていました。その中で、ホームステイを受けてくれたJFCに心より感謝しています。

(稲塚由美子さん/ミステリー評論家・ドキュメンタリー映像制作)

◆家庭訪問

(理由) 他人から借りた土地に建てた掘立小屋のような家で、いつ立ち退きを求められるかわからないという生活を送りながら、JFCは日本国籍を得て日本に行き船員になりたい、という夢を語っていた(船員になるならフィリピンの方がいいのではないかと、思うが)。ハングリーな意欲と、同時にやるせなさを感じた。(近藤博徳さん、JFCネットワーク理事、弁護士)

